

料金後納

ゆうメール

MACNEWS

〒616-8156

京都市右京区太秦西野町20

TEL 075-871-0374. FAX 075-882-3777

Eメール mac.terakoya@gmail.com

URL <http://www.mac-terakoya.com>

今月号の内容

※ えっ、何を忘れたって!?

「先生、鉛筆と消しゴム忘れました!」

「トライアルの感想文忘れました、お母さんが・・・」

「ソロバン持ってくるのを忘れました!」

今までは、「仕方ないな～」

「次忘れたら、その時には即退室!約束やで」

と、猶予を与えていましたが、全く状況は改善されません。

なぜ、忘れ物が減らないのか?

それは、忘れ物をしても困ることがないからです。

子どもが忘れ物をすると「まあ、これがないと今日は困るのに!」と、慌てて学校に持っていくお母さんがいます。

一方、こんなお母さんもいます。子どものランドセルの中身を毎日チェックして、忘れ物が無いように準備万端整えてあげているのです。

さらに学校ではどうでしょう?忘れ物をすれば先生は叱るでしょうが、そのあとでたいてい、「それじゃあ、隣の人に見せてもらいなさい」「誰か貸してあげなさい」ということになるので



す。

困る前に、親や教師がアレコレ手を出して段取りをつけてあげるのです。

結局、子どもは困りません。先生やお母さんにおこられてもその間じっと我慢していれば、あとは周囲が何とかしてくれるのですから。

何度も何度も忘れる子どもは、怒られるのに慣れてしまっているのです。むしろ自分から誰かに「貸して」と頼まなければならなかったり、工作の材料がなくて困ってしまったりする方が、忘れると大変だな、と実感できます。

学校に行く準備、親がしている場合は、親は次のようなことを考えないのでしょうか？

将来、学校を出て、親が手助けできない環境になったとき、この子達は生きていけるのでしょうか？

自分で忘れ物をしないようにさせたいのならば、 とにかく子供自身に困ってもらうことです。

このことを踏まえ、現在は忘れ物をしたときは、生徒達がこの失敗を乗り越えるにはどうすれば良いかを考え、動いてもらうために、即ち、忘れぬ方法を自分で考えてもらうために「今回だけは、・・・」と言う措置をしないことにしました。

『優しさ』『愛情』『面倒見の良さ』という美名のもとに、子ども達が失敗する体験の場を奪わないことにしたのです。

このことにより、何人かの生徒が泣きながら帰りましたが、その後忘れ物をする生徒は、ほとんどいません。

「忘れ物が多い子は、なくし物も多い」と言われています。

「どうしてなくしたの？ この間も買ったばかりじゃないの！」
なんて叱りながら買ってあげているかあらです。

いくら怒られたって、なくしたら買ってもらえるのであれば、子どもは困りません。子どもとしては、お母さんが怒っている間、じっと首をすくめて我慢していればいいのですから。

この場合、買ってあげるな！　ということではなく、なくせば自動的に買ってもらえるという仕組みを変えなくてはなりません。

「ああ、買ったばかりの定規なくしちゃったんだね。それは残念だったね」

これだけ言って、様子を見ていけばいいのです。定規がないと困るのは子供はずですから、何もお母さんが怒る必要はありません。

「定規がないと先生に叱られちゃうよ」

「それは困ったね。どうする？」

答えはあくまで、子どもに考えさせるのです。

「買ってよ。明日使うんだもん」

「でもねえ、なくすたびに買っているとお金がもったいないなあ。他にできることはないかな」

「・・・もう一回探す」

「じゃあ、一緒に探してあげようか」

探しても出てこない場合は

「お願いだから、買って」

と、子どもは頼んでくるでしょう。

きちんと探して上で買ってほしいと頼んできたのですから、そこで買ってあげることもできるでしょうし、学校でもう一度探したらどうかな、ということもできます。

授業中のトイレの使用も禁止です。

今、小学校では授業中にトイレに行く生徒がかなりいるそうです。

生理的現象だから、仕方ないと許しておられるようですが、実体はトイレに行って遊んでいるという話を生徒から聞きました。

何のために休憩時間があるのでしょうか？

この時間にトイレに行けば、授業中に行く必要はありません。

つい最近、MACでもありました。トイレに行ってトイレットペーパーで遊び、トイレを詰まらせてしまった生徒がいるのです。

こんなことから、全面的にトイレの使用を禁止しています。

幼児さんを連れて、迎えに来られる場合も、必ずトイレをさせてからお越し下さい。

授業中にトイレを貸してくれと言われ、スタッフの手を煩わせ、授業を中断せざるを得なかった例がありましたので・・・

ところで、「家」は、誰にとっても安心できる場であることが理想です。

イギリスの国立家族育児研究所が、次のような質問に「はい」と答えられる子どもの数を推定するために調査を行いました。

さあ、子ども達は、どのように答えるでしょうか？想像してチェックして下さい。

① 私の親は、必要とするときにいつもそばにいてくれる。

② 私の親は、私を愛し、大切にしていると感じさせてくれる。

③ 私は、抱えるどんな問題でも親に話すことができる。

④ 私の親と、私はたくさん話し合う。

⑤ 私の親は、必要とする注意を私に向けてくれない。

⑥ 私の親は、自己嫌悪を私に感じさせる。

イギリスの結果は、

① 76%

② 65%

③ 56%

④ 20%

⑤ 11%

⑥ 7%

①～④の関係が理想であり、⑤⑥と子どもに思われたいように接したいモノです。

※『子育ての鉄則』とは

- ・ **3歳までは肌を離さない、**
親は出来る限りの愛情を注ぎ、安心感を与える

- ・ **7歳までは手を離さない、**
手を抜かずにしっかりと、子どもに“しつけ”をしなければならない時期

『躰ける』年齢は、3歳～7歳。この時期が、子どもの『躰』年齢。

MACが、低学年からの入塾を勧めている理由は、低学年時の方が空間認知能力を育みやすく、またこの時期に「できた」「やれた」という成功体験を多くさせることが自己肯定感を育み、その後の能力の伸長につながるからなのですが、実は『躰年齢』をも考えているからなのです。

子どもは、大人が想像もできない行動をする。螺旋階段の手すりを滑り降りた子もそうです。

では、このような場合、周りの大人はどのような行動をとればよいのでしょうか？

幼児の想像もできない行動に対して「叱る」「しつけ」をするのは、次回から絶対繰り返さないという学習をさせることが必要なのだから、

- 1、その場で
- 2、毅然とした態度で(相手の目を見て、言葉と態度を一致させる)
- 3、客観的事実を指し示し
- 4、許されないことであること(何が悪いかを明確に)
- 5、冷静に伝える(感情的でなく)

これは、企業の採用基準にある社会のルールを守れる倫理観があるのかどうか？にもつながるものであり、大人になってから身に付けられるものではないことを肝に銘ずるべきであり、大人になって身につくものではないのです。

- ・ **13歳までは目を離さない**
中学2年生になるまでは、子どもの行動や様子をいつも見て、変わったことはないかと観察し、また社会規範も教え込んでいくことが大切

距離感を保ち、子どもを信用して見守る姿勢で！

・ 19歳までは心を離さない

小1プロブレム（小学校に入学した子どもが落ち着いて教師の話を受けず、友達と騒いだり立ち歩いたりして授業が成り立たない現象）が社会問題になっていますが、大きくは家庭での“しつけ”がしっかりなされなかったことが、その一因として挙げられます。

MACも4月～5月にかけて小1プロブレムで、バタバタしましたが、ようやくここにきて落ち着いて授業に取り組めるようになってきました。

驚いたのは、おそらく家庭では叱られたことの無い子が少なからずいたことです。

注意をすると、「何で、いちいちそんなこと言うの？」と逆切れされましたので・・・・・・

子どもが悪いことをした時に、泣いてもいいから、きっちり叱っておかないと、後々親が泣くことになります。

ところで、小学校低学年に時期は「なぜなぜ期」と言われ、考えることの始まりの時です。「なぜ」「どうして」と答えに窮するような質問を次々に繰り返します。

この時大切なのは、親がうるさい、面倒くさいと思わず、子どもの目を見て、「しっかり対応することです。分からないことは一緒に調べたり、考えたりしてください。

なぜなら、後々の学習能力に差が出ることもあるからです。

大人が口を出す必要がるのはどのような時でしょうか？

1、危機的状況・・・命を危険にさらす、他人に迷惑をかける、法に触れる行為に及ぶ
有無を言わず介入、「ダメなものはダメ」と言う毅然とした態度を一貫してとることです。

2、習慣化の恐れ・・・ゲームばかりする。試験前なのに勉強しないなど

I（私）メッセージで、「おかあさん、あなたがゲームばかりしているので心配だわ」
「明日から試験なのに、あなたがいつまでもテレビを見ているので、大丈夫かなとすごく不安なのだけど」

それ以上踏み込む必要はありません。これだけでいいのです。